

## ソ連社会のロシア語をめぐる言語学的諸問題

高橋 健 一 郎

## はじめに

20 世紀最大の事件とでも言うべきロシア革命とソ連の成立は、ユートピアを作り上げようとした実験でもあり、その影響は人間社会のありとあらゆる領域に及んだ。もちろん言語にもである。革命勢力は新しい世界をまず言葉で構築しようと、言葉を駆使して輝かしい未来像を描き出し、いろいろな物語を生み出した。しかし、いったん権力の座を奪った勢力は、権力維持のために、もはや別の新しい言葉を許すことはできなくなる。むしろ言葉を固定しなければならないのである。新しい世界を創造するという感動に満ちた「新しい言葉」は、こうしていつの間にか枯渇した図式言語になりさがっていき、そうして枯渇した言語が社会にはびこっていく。ソ連社会の言語実験とは、そういうものであった。

1990 年代初頭のソ連崩壊に前後して、ロシアの言語学の分野でこの「言語実験」に対する関心が高まり、ソ連社会の「全体主義言語」、「ソビエト語」、「ニュースピーク **новояз**」などと呼ばれる、ソビエト・イデオロギーが反映された言語現象に関する研究が盛んに出された時期があった。<sup>1</sup> 言語学におけるこのテーマの流行はすでに過去のものとなった感があるが、2017 年にロシア革命 100 周年を迎え、革命と人間の文化や社会活動全般との関係に再び関心が向けられるようになったほか、後期ソ連社会の言語の問題を鮮やかに論じてみせるアレクセイ・ユルチャクの『最後のソ連世代』の日本語訳<sup>2</sup> が出版されたこともあり、革命やソ連社会と言語をめぐる問いがまた関心を呼んでいるようだ。

本稿は、「ソ連社会の言語（ロシア語）」という問いをめぐる言語学的な問題を、先行研究に触れながら、いくつかの面から整理し、この問いをめぐるどのような研究の方向性が可能かを考えてみたい。その際、主として、スターリン時代の言語を対象とし、最後に、ポスト・スターリン期の言語の問題に関しても触れることとする。

<sup>1</sup> その研究動向に関しては、次の拙論を参照のこと：高橋健一郎「1930 年代後半の『ソビエト語』の言説空間の分析」博士論文、東京大学、2005 年。また、本稿のいくつかの論点は、この拙論の序章と第 I 部の記述が基になっている。

<sup>2</sup> アレクセイ・ユルチャク（半谷史郎訳）『最後のソ連世代：ブレジネフからペレストロイカまで』みすず書房、2017 年。

## 1. ニュースピークとしての「ソビエト語」

### 1-1. ニュースピーク

上記の「ソビエト語」研究がロシアで出されるようになったのは、1949年にジョージ・オーウェルによって書かれたアンチ・ユートピア小説『1984年』のロシア語訳が1989年に出版されてからのことである。この小説ではオセアニアという架空の全体主義国家が描かれ、そこでは「イングソック」（イギリス社会主義）のイデオロギー的要求に応えるため、つまり独立した思考を廃止し、人々が異端的な思考を表現したり、あるいはそもそも考えつくことができないようにするため、「ニュースピーク Newspeak」と呼ばれる言葉が人工的に作り上げられる。言語を国家によって管理されることによって、人々は国家が望むようにしか思考できなくなるというのである。「ソビエト語」研究の多くもまたこのような言語観を程度の差こそあれ共有している。下で見るように、この言語観自体に問題点はあるが、研究の第一段階として「ソビエト語」を「ニュースピーク」的な一つの体系と捉えて、その特徴を記述することは可能である。ここでは、まず「ニュースピーク」としての「ソビエト語」の言語的特徴がどのようなレベルで記述し得るのかについて、主に先行研究を整理しながら考えてみたい。

### 1-2. 語彙

語彙は最も変化を受けやすい言語単位であり、ソビエト時代のロシア語の意味変化について触れた研究は数多い。特筆すべきは、1995年にクーピナによって書かれた『全体主義言語』と、1998年にペテルブルクで出されたモキエンコとニキチナによる『ソビエト語詳解辞典』である。<sup>3</sup>前者は、スターリン時代に出版されたソビエト最初のロシア語辞書であるウシャコフ編纂の『ロシア語詳解辞典』を主要な資料として、イデオロギー素たる語彙を網羅的に分析する。また、後者は、ソ連時代の単語、イディオム、諺、アフォリズムその他を相当数収録し、それぞれに語彙論・辞書編纂学の知見を生かした記述を加え、700頁にも及ぶ大著となっている。

「ソビエト語」の語彙体系の根底にあるのは、多くの研究から分かるように、極めて単純な「善悪二元論」である。そこでは、ある種の語彙が文脈を超えてすでに絶対的な価値を帯びている。例えば、1930年代半ばに関して言えば、「レーニン」、「スターリン」、「社会主義」、「共産主義」、「プロレタリア」、「労働者階級」、「共産党」、「スタハーノフ運動」などは絶対的にプラスの価値を持つ語彙群であり、そして「資本主義」、「ファシズム」、

---

<sup>3</sup> *Купина Н.А.* Тоталитарный язык: словарь и речевые реакции. Екатеринбург, 1995; *Мокшенко В.М., Никитина Т.Г.* Толковый словарь языка Совдепии. СПб., 1998. 他のソビエト語の語彙に関する研究については、高橋健一郎「1930年代後半の『ソビエト語』の言説空間の分析」14頁を参照。

「トロツキスト」などは絶対的にマイナスの価値を持つ語彙群である。

### 1-3. 文法・テキスト

「善」と「悪」のイデオロギー的価値を表す語彙と結びつく修飾語もやはり制限を受ける。言うまでもなく、プラスの価値を帯びる名詞にはプラスの価値を持つ形容詞、マイナスの価値をもつ名詞にはマイナスの価値を持つ形容詞しか結びつかないのが基本である。例えば「レーニン」という名詞は「偉大な」という形容詞とは結びついて、決して「臆病な」という形容詞とは結びつかないのである。<sup>4</sup> これは非常に厳格な規則であるがゆえに、「ソビエト語」では「偉大なレーニン」「偉大な十月革命」「不滅の偉業」「卑劣な資本主義」などに見られるような、一連の「枕詞（常套形容語）」が定着することになった。<sup>5</sup>

このような善悪二元論は、次のような論理関係のレベルにも反映される。ヴァイスは様相論理学で言うところの「普遍量子（あらゆる *всякий*」「すべての *весь*」など）／存在量子（「ある種の *известный*」「或る *некоторый*」など）と「必然性／可能性」という二つの対立について興味深い分析をしている。一般的に普遍量子は「われら」の指標となり（「われらはみな…」）、存在量子は「かれら＝敵」の指標となりやすい（「…という者が存在する）」ということはよく指摘されるが、<sup>6</sup> これについてヴァイスはさらに「必然性／可能性」という対立をそれに重ね合わせて論じている。<sup>7</sup>

このような善悪二元論を基礎とする「ソビエト語」は、当然「テキスト」レベルでもある種の制限を受けることが予想される。このレベルの研究として、特定のジャンルのテキストを分析したものや、文体に関する研究もすでにかかなりの数が出されている。例えば、スターリンの演説の文体分析や、スローガン、ソビエトの諺の形式や機能の分析、あるいはスターリン時代の「聖典」であった『共産党史・小教程』のテキストをナラトロジー的に分析したものなど、さまざまな研究が存在する。<sup>8</sup>

<sup>4</sup> これは言語学の用語を使えば、「選択制限」の問題である。

<sup>5</sup> 例えば、次の文献を参照：*Левин Ю.И. Семиотика советских лозунгов // Избранные труды: Поэтика. Семиотика. М., 1999. С. 542-556; Юрчак А. Это было навсегда, пока не кончилось. Последнее советское поколение. М., 2016. С. 143-145; Еулчак 『最後のソ連世代』 81-83 頁。*

<sup>6</sup> 例えば、ロマネンコは、われらと敵のどちらにも属さない（故に否定的な価値を与えられやすい）「不明者」（中間層）を名指す時に多用される存在量子の代名詞を「言語シグナル」としていくつか挙げている（*Романенко А.П. Советская словесная культура: образ риторика. Саратов, 2000. С. 83*）。

<sup>7</sup> *Вайс Д. «Новояз» как историческое явление // Гюнтер Х., Добренко Е. (ред.) Соцреалистический канон. СПб., 2000. С. 549-552.*

<sup>8</sup> 詳しくは、高橋健一郎「1930年代後半の『ソビエト語』の言説空間の分析」16-17頁を参照のこと。

#### 1-4. 機能

ここで言語の「機能」についても触れておこう。有名なヤコブソンの言語の六機能のうち、情報伝達を主目的とする「関說的機能」、発話者の感情や態度を表現することを志向する「情動的機能」、また命令や依頼などのように相手の行動や態度に影響を及ぼそうとするような「動能的機能」は、多くの言語メッセージにおいて基本となる機能であり、特に触れる必要はないだろう。それに対して、若干の説明を要するのは残りの三つの機能、つまり「交話的」、「メタ言語的」、「詩的」機能である。

「交話的機能」とは、コミュニケーションの接触を志向するものであり、メッセージの内容よりもコミュニケーションが成立すること自体を目指す働きである。つまり、そこで重要なのは、何を言うかというよりも、とにかく何かを言うという事実である。本稿の7でも触れるように、後期のソ連社会においては、言葉の文字通りの内容よりも、そのパフォーマンス的な意味に重点が置かれるようになる、つまり「言語の儀礼化」が進むとされるが、その一つ一つの発話を言語機能の面から見れば、それは交話的機能がドミナントである例と言えよう。<sup>9</sup>

「メタ言語的機能」とは注解機能であり、言葉のコードを志向する機能だが、これも「ソビエト語」と無縁ではない。例えば、オーウェルの『1984年』の中では、辞書の書き換えの達成によって「ニュースピーク」が完成するとされる。<sup>10</sup> 実際には辞書の書き換えそのものによって言語が変化するのではないが、ソ連社会の中でも新しい言葉が次々と生まれ、言葉の意味が変化し、それを説明して固定する必要性が生じたのは事実であった。実際、初期の頃は新聞などのメディアの言葉は主にエリート層に向けられており、一般大衆にとって理解不能なものであったと言われており、<sup>11</sup> 1920年代のある農村での調査では、「ソビエト語」の基本語彙である「階級の敵」や「宣伝」、「陰謀」などの語がまだ民衆に獲得されていない様子が報告されている。<sup>12</sup> そのような状況下のソ連初期の国家的な課題の一つは、宣伝・煽動を通して新しい言葉を民衆に教え込んでいくことであった。その課題遂行のための一つの手段となったのは、本格的な辞書の編纂、出版である。

---

<sup>9</sup> なお、ユルチャクは後期ソ連社会の「言語の儀礼化」を「詩的機能」が強い例だと述べるが (Юрчак. Это было навсегда, пока не кончилось. С. 167-168, 256; ユルチャク『最後のソ連世代』101-102, 172頁), むしろ「交話的機能」の方が強いと思われる。

<sup>10</sup> ジョージ・オーウェル (新庄哲夫訳)『1984年』ハヤカワ文庫, 1972年, 66頁; George Orwell, *The Complete Works of George Orwell. Volume Nine: Nineteen Eighty-Four* (London: Secker & Warburg, 1979), pp. 53-54.

<sup>11</sup> Jeffrey Brooks, *Thank You, Comrade Stalin! : Soviet Public Culture from Revolution to Cold War* (Princeton: Princeton UP, 1999), pp. 12-13.

<sup>12</sup> ニコラス・ワース (荒田洋訳)『ロシア農民生活史:1917-1939年』平凡社, 1985年, 201-202頁; Nicolas Werth, *La vie quotidienne des paysans russes de la révolution à la collectivisation (1917-1939)* (Paris: Hachette, 1984), pp. 239-240.

「等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する」と定義される「詩的機能」は主として芸術作品に特徴的であり、言葉の社会的役割とは一見無関係であるように見えるかもしれないが、ヤコブソンが「詩的機能」を説明するために挙げている例が「I like Ike」という政治スローガンであることを思い起こす必要がある。メッセージそのものに焦点を当てるこのような「詩的機能」は「ソビエト語」の中にも当然多く存在する。

## 2. 「ソビエト語」の言説空間・ジャンルの問題

ニュースピークの言語観の前提にあるのは、言語が人の思考や経験の仕方それ自体を決定するような作用を備えていると考える「言語決定論」、そしてマス・メディアが直接民衆に作用するという社会学的「皮下注射理論」である。前節ではそれらが孕む問題点をとりあえず無視したまま議論を進めた。しかし、権力側が言葉の意味を決定して支配し、民衆がその言語を自動的に受け入れ、それによってしか思考を許されないということが厳密な意味では実際に起こり得ないことは言うまでもない。実際の言語活動に即した形で「ソビエト語」を考えるために、本節と次節で、「ニュースピーク」モデルを大きく二つの方向に開いてみたい。

「ソビエト語」とは第一義的には「ソビエト・イデオロギー」が反映された言語と考えることができるが、実際には具体的な言説空間の中で考察されるべきものであり、それが「ニュースピーク」モデルを超える第一の方向性である。ここで言う「言説空間」とは、さまざまな言説が互いに関係しあい、相互に依存しあい、ある種の体系を作り上げている空間のことである。

大部分が文盲の農民であったロシアにおいて、民衆が革命前の局所的な言語コミュニケーションから抜け出て、国家的な言説空間に組み込まれていくということは自動的に起こったわけではないのであり、そのような国家的な言説空間が作られる過程自体もまた考えなければならない。

そこに関わるのは、「メディア」の問題、メディアを支える「テクノロジー」の問題、そしてそれらと密接に関わる「ことばのジャンル」の問題である。これに関しては、バフチンの「ことばのジャンル」論が示唆的だろう。個々の発話とは「今、ここ」に存在する一回限りの個別的なものには違いないが、しかしバフチンは、単に発話の個別性、一回性のみを強調するのではなく、「ジャンル」という比較的安定した「鑄型」の存在を強調する。発話者の意思はまずその鑄型を通過し、その鑄型のタイプに従いながら一定の形を取るものである。<sup>13</sup> 「ソビエト語」においても、ある意図がジャンルというテキスト・タイプを通過することによって、そのテキスト・タイプの言語的特質あるいはメディア論的特質

<sup>13</sup> Бахтин М.М. Проблема речевых жанров // Эстетика словесного творчества. М., 1979. С. 257.

によってさまざまに規定されながら、一つのテキストとして具現化されていくと考えられる。

### 3. 「エルゴン」への傾斜

#### 3-1. 言語の二律背反

「ニュースピーク」モデルを超えるもう一つの方向性は、言語の「全体主義性」とでも言うべきものへの注目である。ウクライナで 1995 年に開かれた「全体主義社会の言語」シンポジウムの論文集に収められたエルモレンコの「全体主義の言語と言語の全体主義」によると、「全体主義の言語」という問題を考える際には言語自体の「全体主義性」の問題を考えなければならない。言語記号には一方で「言語相対主義」や「言語決定論」と呼べる性質がある。つまり、言語は世界と人間の間位置し、世界の認識や意味付けの媒介をするものであり、それは「出来上がった変更不可能な規則の体系」として言語使用者に有無を言わさず押し付けられる。その意味で言語はそれ自体「全体主義的」と言うことが可能である。しかし、その一方で言語は、例えば同音異義や多義性などの間で非常に揺れの大きいものであり、本質的に柔軟なものでもある。つまり、言語の記号体系は同時に全体主義的でもあれば、多元的でもあり、この両者の中で平衡を保ちながら存在しているものである。これをフンボルト的に「エルゴンとエネルゲイアの二律背反」と言い換えてもよいだろう。エルモレンコによれば、全体主義体制の下ではこのバランスが崩れ、言語の「全体主義性」の側面が優勢になるという。<sup>14</sup> オーウェルのニュースピークの議論が、「言語の全体主義性」つまり言語決定論しか考慮に入れず、それを無条件に絶対視しているのに対し、エルモレンコは、言語がもつ二律背反性のバランスが崩れ、「言語の全体主義性」(エルゴン)の側が優勢になるところに、「ソビエト語」の本質を見出している。<sup>15</sup>

さらにエルモレンコによれば、言語の「全体主義性」が優勢になった場合、記号と対象の結びつきが固定されるが、これは科学の言語とは似て非なるものである。科学の言語の場合は記号と対象の結びつきが約束事に基づいているのに対して、全体主義言語では「約束事」が忘れ去られてしまい、言語が現実にとって代わるようになる。さらに、そのような全体主義の言語によって捉えきれないものは、単に無視され、名づけられない、つまり

---

<sup>14</sup> Ермоленко С.С. Язык тоталитаризма и тоталитаризм языка // Яворьска М. (ред.) Мова тоталитарного суспільства. Київ. С. 7-15.

<sup>15</sup> また、コルネイ・チュコフスキイがソ連のお役所的文体を批判して 1962 年に著した『生きている言葉 Живой как жизнь』にも同様の考え方が示されている。その著書に関しては、次の拙論を参照のこと：高橋健一郎「イデオロギー批判としての言語分析：あるいは〈ソビエト語〉作文小教程——K. チュコフスキイ『生きている言葉』の言語学的読みの試み——」『言語態』（東京大学言語態分析研究会）第 1 号、2000 年、41-52 頁。

存在しないものとされるのである。このように言語が現実にとって代わった結果、この言語と関係をもつ言説は、現実との関連で評価されるのではなく、それがどれだけ全体主義言語の内的な意味の基準に合致しているかによって評価されるようになるという。<sup>16</sup>

このような観点から「ソビエト語」の問題を考えると、単に「ニュースピーク」としての言語の内的構造を記述して終わりというものではなく、本来柔軟であるはずの言語がいかにか固定化されていくかにも目を向けていかなくてはならないことが分かる。そして、その固定化作用については、言語内的、言語外的の両方の問題を検討しなければならない。

### 3-2. 言語のイデオロギー的使用

上述のような言語の「固定化」のうち、言語内的な作用をもつ言語使用を「イデオロギー的」な言語使用と呼ぼう。言葉のイデオロギー的使用の問題は、言語学の「談話分析」の一部門である「クリティカル・ディスコース・アナリシス」(critical discourse analysis, 以下「CDA」)で理論化されつつある。CDAとはハリディの機能文法を一つの母体として発展し、「社会記号論」や「カルチュラル・スタディーズ」などとも結びついたもので、社会における権力関係を含む談話を批判的に分析する一連の談話分析研究のことである。そこでは例えば、言語の中に刷り込まれた社会権力を語彙や文法のいろいろなレベルで暴き出そうとし、動詞の名詞化や、能動態と受動態の切り替え、メタファーの使い方、前提表現、代名詞の使い方、語彙の含意など、さまざまな点に注目しながら分析が行われている。

あるイデオロギーがどのように言語化され、どのように「自明なもの」として「正当化」されるか、また「敵対者」がその「正当性」をいかに突き崩そうとし、そして「ソビエト語」の話者がいかにそれを防ごうとするのか——その言語的メカニズムは決して明らかにされているとは言えない。「ソビエト語」研究の中では、動詞派生名詞表現のイデオロギー性を問うセリオやユルチャクの研究などが部分的にこのような問題を扱っている数少ない研究例として挙げられるが、<sup>17</sup> このCDAの視点をもった研究は必ずしも多くはなく、もつと議論されてもよい問題であると思われる。

<sup>16</sup> これと非常に良く似た主張をしているものにミハイル・エプシュテインの論考がある。それによると、ソ連社会は指示対象を持たぬ記号同士が集まって一つの閉鎖的集団を構成し、互いが互いに言及しあっているような高度な「文学的」段階に達した記号世界だった。そこでは現実が完全に記号化されてしまい、イデオロギーそのものを除いて、他の現実など何一つ存在しなくなっていたという (Эпштейн М. Постмодернизм и коммунизм // Постмодерн в России. Литература и теория. М., 2000. С. 58; ミハイル・エプシュテイン (望月哲男訳)「ポストモダニズムとコミュニズム」『現代思想』vol. 25-4, 1997年, 83-84頁)。

<sup>17</sup> Patrick Sériot, *Analyse du discours politique soviétique* (Paris: I.E.S., 1985); Юрчак. Это было навсегда, пока не кончилось; Юрчак 『最後のソ連世代』。

### 3-3. 全国的言説共同体の形成

上で述べたように、言語の固定化という問題を考える際には、言語外的な側面にも目を向ける必要がある。革命前のロシア社会は、社会、階級、地域などによる言語的境界の壁が厚く、標準文語の伝統は一般大衆に浸透していなかった。このような状況の中では、言語の固定化はおろか、適切に「ソビエト語」の内容を伝えること自体が困難であり、そのための努力が革命直後からあらゆる分野で進められた。言語学者パノーフは、ソ連社会におけるロシア語の発達の大きな特徴の一つはその「規範性」獲得のための闘いであり、民衆レベルへの「標準語」の定着であったとする。<sup>18</sup> 政治的統一体がその領土内である特定の言葉＝思想を全民衆に獲得させるプロセスが標準語化であり、「標準語」とは、管轄に属する者全員に対して唯一正統にして適法な言語として課せられるものである。

ソ連社会においては、革命直後からそのような標準語化への動きが急展開した。革命によって社会のあらゆる階層間の言語的境界が取り払われ、規範的な「標準語」の編制が進められることになったのである。パノーフの論文によれば、革命を境に標準語を伝える手段が家庭内の伝統から「書物」へと移り、標準語の担い手に大多数の民衆が加わることになる。そして、標準語の模範とされたのは、レーニンを初めとする革命活動家たちの文章であった。<sup>19</sup> ここでパノーフが明らかにしているのは、革命を境に言語教育の権威の中心が私的な家庭から移行し、国家によって統制される「書物＝書き言葉」となったということである。そこには、言語の整備という言語学者の仕事があり、そしてそれを教え込む広義の教育制度、宣伝・煽動活動があり、そして「正しい」語りでもって模範的なテキストを量産する文学者その他の書き手・語り手が存在したのである。

そのプロセスが完成に向かったのは 1930 年代のことだった。ロマネンコによると、20 年代の党の言語活動は基本的にまだ口頭の演説コミュニケーションの状況で行われていたのに対し、30 年代は書き言葉（印刷物）のコミュニケーションの条件下で行われ、言語活動一般を規定するのが文書となった。<sup>20</sup> 口頭コミュニケーションから文書コミュニケーションへの移行に伴って、全国的な言説空間が築かれていった。そうして、革命前には

<sup>18</sup> Панов М.В. О развитии русского языка в советском обществе // Вопросы языкознания. 1962. № 3. С. 3.

<sup>19</sup> Там же. С. 4-6.

<sup>20</sup> Романенко. Советская словесная культура. С. 42-47 を参照。また、1920 年代と 30 年代の違いをレーニンとスターリンの違いに見ているギュンターの指摘も興味深い：「生前のレーニンは雄弁家、煽動家、演説家であり、燃え上がる演説で知性と心に火をつけるのだが、一方のスターリンは『書の主』である。前者に特有なのは口頭のレトリックの特徴であり、後者に特有なのは書き言葉の特徴である」（Гюнтер Х. Архетипы советской культуры // Гюнтер и Добренко. Соцреалистический канон. С. 763）。もっとも、30 年代も「話し言葉」による宣伝・煽動がなくなったわけではなく、ラジオや集会などを通して盛んにおこなわれていた。しかし、それはすでに「書き言葉」を基礎としたいわゆる「二次的な声の文化」（ウォルター・オング）であることに注意が必要である。



かなりな程度多様な言語世界であったロシア社会に、30年代には一元的な言語空間が定着する、つまり「言語のイデオロギー的使用」とはまた異なる次元の言語の「固定化」（＝エルゴンへの傾斜）が起こったと考えることができる。

#### 4. 「ソビエト語」の物語構造

##### 4-1. 物語的認識

前節までの議論を踏まえて、ここからは「ソビエト語」の基本特徴と、諸ジャンルからなるその「言説空間」について少し具体的に考えてみよう。

「ソビエト語」の根底に1)「われらは善い」、2)「かれら（敵）は悪い」という二つの大命題があることは分析するまでもない。この二つの命題はマルクス主義の「階級闘争史観」に基づくものと見なすこともできるだろうが、しかしこのような単純な「善悪二元論」は多くの社会にあるものであり、そのみを「ソビエト語」の基本特徴として設定するのはあまり有効ではないだろう。「ソビエト語」における世界の認識の仕方、つまり世界観＝イデオロギーの反映、そして言語の固定化の作用を最も見やすいのは、レトリック論で言うところの「体系化された隠喩（メタファー）」としての「諷喩（アレゴリー）」、つまり「物語」のレベルであると考えられる。<sup>21</sup>

##### 4-2. 「ソビエト語」の物語の形成——ユートピア的言説から「ソビエト大家族神話」へ

ここでは、「ソビエト語」が形成されていった革命後からスターリン期に関してその物語の特徴を考えてみよう。多くの研究がすでに明らかにしているように、1920年代から1930年代へと時代が進む中で、語りの性格が変化していったのが見て取れる。

ハンス・ギュンターによれば、1920年代は英雄神話が支配的であり、そこでは平等な兄弟関係が中心となるが、その後レーニンという親を失った兄弟たちの中からスターリンという「長兄」そして「父親」が出てくる。そして、集団化のカオスの中から、「祖国」という形象として現れることの多い「グレートマザー」の元型が、安定化の要素として生まれる。こうして1930年代半ばまでにソビエト文化の深層構造には、〈父親〉、〈母なる祖国〉、英雄的（息子と娘たち）という「大家族」が形成され、そして同時にこの大家族をつねに脅かす〈敵〉の元型が存在していた。<sup>22</sup>

<sup>21</sup> 例えば、「諷喩とは、まだ漠然としか把握されていない《世界》へ、理解可能な言述の組織を投影することによって、《世界》を理解可能なかたちに組織化するところみ」とする佐藤信夫のレトリック論を参照のこと（佐藤信夫『レトリックの消息』白水社、173-176頁）。

<sup>22</sup> Гюнтер Х. Архетипы советской культуры. С. 743-784. なお、家族のメタファーについては、ブル

カテリーナ・クラークによれば、この「大家族神話」が成立したのは、ソビエトの言説において 1931 年頃から象徴系が変化したことと関係がある。<sup>23</sup> 1920 年代末からの第 1 次 5 ヵ年計画の時期には「機械」のメタファーがソビエトの政治言説の中で支配的であり、人は国家という「機械」の「ネジ」と捉えられていたのに対し、1930 年代に入って次第に「機械」のメタファーは力を失い、30 年代半ばまでには「良い指導者や組織者」、つまり「人間」に関心が移っていく。このような状況の下で成立する「ソビエト大家族神話」は、労働生産性向上の運動や極地探検その他において〈英雄〉が数多く生み出される出来事と結びつきながら、「ソビエト語」の主要テーマの根本をなすようになる。<sup>24</sup> つまり、「ユートピア的に彩られた革命時代から、神話創造にもとづいた文化への本質的なシフト」<sup>25</sup> が 30 年代に入って生じるのである。

#### 4-3. 「ソビエト語」の物語のプロット

このような「ソビエト大家族神話」を中心に持ちながら、スターリン時代の「ソビエト語」による物語は具体的にどのようなプロットをとるのだろうか。スターリン時代に関して言えば、上記の四つの元型は実際にすべて重要なものだったが、多くの語りの中で典型的に現れるのは〈英雄〉と〈敵〉の形象であった。

クラークは、ソビエト小説では主人公が「意識」（自覚）を獲得する旅に出発し、途中でしばしばより自覚的な〈援助者〉（ギンターは〈賢父〉と呼ぶ）の支援のもとにさまざまな試練を乗り越えながら、最後には目的を達成するという、「通過儀礼」の物語が典型例だとしているが、<sup>26</sup> 「通過儀礼」は単に小説というフィクションにのみ特徴的なのではなく、さまざまなメディアを通して語られる現実世界の〈英雄〉についての語りにも特徴的であり、<sup>27</sup> また通過儀礼自体がソビエト文化全体に浸透したものであった。<sup>28</sup>

そして、そのような「教育」の語りは必然的に英雄の手本を生み出し、さまざまな模範

---

ックスも触れている：「スターリンについて言及がある『プラウダ』紙（1933-39 年）の 76 の社説のうち、友情と家族のメタファーが 23 で用いられていた」（Brooks, *Thank You, Comrade Stalin!*, p. 268）。

<sup>23</sup> *Кларк К. Сталинский миф о «Великой семье» // Гюнтер и Добренко. Соцреалистический канон. С. 786.*

<sup>24</sup> 例えば、有名なものだけでも、チェリユースキン号乗組員と彼らを救済したパイロット、パパーニンに率いられた北極探検隊、スタハーノフ労働者たち、パヴリク・モロゾフ少年などをめぐる語りや当時のメディアで盛んに展開された。

<sup>25</sup> *Гюнтер Х. Соцреализм и утопическое мышление // Гюнтер и Добренко. Соцреалистический канон. С. 42.*

<sup>26</sup> *Katerina Clark, The Soviet Novel: History as Ritual (Chicago: Chicago UP, 1985), p. 167.*

<sup>27</sup> *John McCannon, Red Arctic: Polar Exploration and the Myth of the North in the Soviet Union, 1932-1939 (New York: Oxford U.P., 1998), p. 103.*

<sup>28</sup> ソビエト文化のさまざまな「通過儀礼」を分析した次の文献を参照：*Глебкин В.В. Ритуал в советской культуре. М., 1998.*

的英雄像が生まれていく。互いに異質である人間が集まって社会が成立する際の結合の法則をタルドは「模倣の法則」と呼ぶ。それは称賛という情念を動力として「手本」を模倣し、それに同化するということである。手本になる人物は卓越しており、威信に満ち、大衆はそうした卓越した個人の威信に魅惑され、それに同化しようとするのである。<sup>29</sup>

〈英雄〉と並んで〈敵〉の元型も重要であり、〈英雄〉と〈敵〉が闘うというテーマも「ソビエト語」の語りを中心であった。革命直後は革命における闘争についての語りが支配的であり、20年代を通じては、ソ連外部における搾取階級と被搾取階級との闘争が中心に語られ、<sup>30</sup> 30年代半ばになれば、ドイツのファシズムや日本の軍国主義などとの闘いのテーマが急浮上してくる。

このように、1930年代には大衆が英雄と同一化し、英雄を真似ることが、国家的課題遂行の務めとされ、スターリン時代の新聞雑誌で語られる多くの出来事が英雄たちの輝かしい勝利と妨害者たちの邪悪な陰謀との二つのカテゴリーに分けられるような状況であった。つまり、「ソビエト語」の言説のタイプとしては、英雄の形象を作り上げて大衆を同一化させるという《教育の物語》と、英雄と敵との《闘争の物語》が、最も基本的なパターンとして考えられるということである。<sup>31</sup>

## 5. 言説空間における「参照テキスト」とそれへの応答

### 5-1. 参照テキスト

「ソビエト語」の基本的な物語構造をまとめたが、次に考えるべきことは、実際のソ連社会の言語活動において、これらの物語がどのようなジャンル編制のもとで展開していったかということである。ここではスターリン期に限定し、さまざまなジャンルのディスコースが互いに参照しあい、応答しあい、互いに影響関係にあるような「言説空間」について考えてみよう。

まずは、ソ連社会のコミュニケーション体系がスターリンの言葉を頂点とするヒエラルキー構造をなしていたという視点<sup>32</sup>による分類法が最も重要だろう。クロンガウスもまた「ソビエト語」の特徴の一つを「言語的先例の優先」とする。<sup>33</sup> つまり、指導者

<sup>29</sup> ガブリエル・タルド『模倣の法則』風早八十二訳、而立社、1924年を参照。

<sup>30</sup> 1918年と1920年代の『プラウダ』の社説における《闘争の物語》について分析した拙論を参照：高橋健一郎「ソビエト国家の『闘争の物語』の生成レトリック——1920年代『プラウダ』紙のメーデーの社説の言説分析」日本記号学会編『聲・響き・記号（記号学研究 18）』東海大学出版会、169-179頁。

<sup>31</sup> 詳しくは拙論を参照のこと：高橋健一郎「1930年代後半の『ソビエト語』の言説空間の分析」。

<sup>32</sup> Романенко. Советская словесная культура: образ ратора. С. 28-31.

<sup>33</sup> Кронгауз М.А. Новейшая история русского языка: эпоха социализма // Языки словяńskie wobec współczesnych przemian w krajach Europy środkowej i wschodniej. Opole, 1993. С. 162.

の地位にある者の言葉が模範となって、国民に伝わっていくということである。「言語的先例」の例として挙げられるのは、例えば指導者の特定の発音だったり、語彙やシンタクスだったりするが、それを含む最大の言語レベルである「テキスト」のレベルもそうであり、「先行テキスト *прецедентный текст*」が模範となって、再生産されていくことが「ソビエト語」の一つの大きな特徴である。

スターリン時代に限って言えば、スターリンの言葉が「ソビエト語」の言説空間における「先行テキスト」として存在する。しかしここでは、「時間性」が全面に出ている（つまり、他のテキストよりも「時間的に前に」ということを含意する）「先行テキスト」という用語の代わりに、「参照テキスト」という用語を用いることにしたい。本稿で「参照テキスト」と言うときに念頭においているのは、「スターリンの言葉が始めにあり、それに対する直接的な反応として他のテキストが生み出された」という場合だけではない。スターリンの言葉はそれ自体に価値があると見なされるために、それが発せられ、メディアで広められた瞬間から「言説空間」の根本的な性質を変えてしまうと考えられる。それは、スターリンの言葉とはまったく異なる文脈から生み出されたテキストであっても、スターリンの「参照テキスト」が登場した後では、必ずそれとの関連において受容されざるを得なくなるということである。

## 5-2. 「ソビエト語」の言説空間のモデル

次に、「参照テキスト」を補強し、それに「応答」するようさまざまなジャンルの体系について考えてみよう。ここで注目するのは、スターリンによる「参照テキスト」をそれぞれのジャンルがどのように支持し、補強し、展開するか、という視点である。それを基本にすると、だいたい次のようなジャンルの分類を考えることができる。

まず、「参照テキスト」をさらに論理的に、具体的に展開する物語を生産していくジャンルがある。それは毎日のように報道される「ジャーナリズムの言語」や、あるいは学習過程で教え込まれる「教科書」、そして巧みな文章で芸術的に展開される「文学作品」、また論理的に展開されるさまざまな学問分野の言説、その他である。

次に、「参照テキスト」を「定式化」するようなジャンルもある。例えば、簡潔な表現の中に、時に詩的言語の形式をとりながら凝縮して定式化する「スローガン」というジャンル。あるいは書物の形でまとめられ、全国民が「聖典」として勉強し、身につけさせられた『スターリン憲法』（1936年）や『共産党史・小教程』（1938年）、『スターリン小伝』（1947）などもある。

そして、これらの「上から」のジャンルと並んで「下から」の発話のジャンルも重要である。人々は例えば集会での発言、また新聞・雑誌への「投書」という作業を通して、み

ずからが国家的な言説の発信者となっていくのであるし、あるいは「自己批判」という作業を通して国家的な「ソビエト語」を身につけていくのである。<sup>34</sup> また、本来「上から」与えられるものではあるが、「大衆歌」というジャンルもここに含めることにしよう。歌は旋律が付けられ、情感を込めて歌われるものであり、人々は「自分の」歌として大衆歌を歌い、血肉化していくのである。

重要なのは、すでに述べたように、これらのジャンルが互いに独立して存在していたのではなく、相互に関係しあい、システムとしての「言説空間」を作り上げていたことである。それは、あるテーマを中心に、それぞれの言説群がさまざまな機能を持ちながら、互いに参照しあい、引用しあい、支持しあいながら展開して作り上げていた空間である。<sup>35</sup>

## 6. 「魔法の輪」モデルを超えて

「国家は言葉の意味を規定し、その用途をきめ、魔法の輪をつくる。ソビエト制度のなかで理解し理解されようとするならば、だれしもこの輪のなかに入らねばならないのである」<sup>36</sup> という「ソビエト語」に関する表現がある。この「輪」のメタファーは言語論ではお馴染みのものであり、例えば、「どんな言語でも、その言語の属する民族の周囲に円周を画いているものであって、人は他の言語の円周の圏内に移り住まない以上、自己の円周の中から抜け出すことはできない」<sup>37</sup> というフンボルトの有名な言葉も思い起こされる。

本稿のこれまでの議論の根底にもこの「魔法の輪」の考え方があり、「魔法の輪」を作り上げるメディアの実践や言語活動、そして「魔法の輪」の内容がいかなるものであったかという側面に目を向けてきた。スターリン期に関して言えば、この方向性で「ソビエト語」という「魔法の輪」の内実について、かなりのことが明らかになるだろう。しかし、ここから抜け落ちてきているのは、「魔法の輪」に対して人々が具体的にどうかかわったのかという視点である。そのような問題を最後に少し考えてみよう。

「ソビエト語」がすべての人を巻き込もうとする「魔法の輪」であり、その「お伽話」が第一の現実であったのは事実としても、その「お伽話」に対する現実の話し手／聞き手

<sup>34</sup> ロシア史研究者コトキンは、ソビエト市民がいかに「ボリシェヴィキ風に語る」ことを身に付けていくかを記している：Stephen Kotkin, *Magnetic Mountain: Stalinism as a Civilization* (Berkeley: University of California Press, 1995)。

<sup>35</sup> 拙論（高橋健一郎「1930年代後半の『ソビエト語』の言説空間の分析」）は、「ソビエト語」の物語構造や、言説空間に関するこれまでの議論を踏まえて、1930年代後半の「ソビエト語」の言説を具体的に分析したものである。

<sup>36</sup> ミシェル・エレール（辻由美訳）『ホモ・ソビエティクス——機械と歯車——』白水社、1988年、336頁；Геллер М. Машина и винтики. История формирования советского человека. М., 1994. С. 263.

<sup>37</sup> ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（亀山健吉訳）『言語と精神——カヴィ語研究序説』法政大学出版局、1984年、95頁。

の態度はさまざまであり得たろう。コトキンによれば、『『ボリシェヴィキ風に語る』ことを知っていることによって忠誠心を公の場で表すことが、最重要の関心事になったが、しかしこれらの行為の解釈には慎重であらねばならない。[.....] われわれは彼女 [模範的な手紙を書いたとされる女性] の手紙があるからといって、それが彼女自身が実際に書いて署名したとされる手紙の内容を信じていたことを意味するのだと解釈すべきではない』。<sup>38</sup> つまり、一見「ソビエト語」の「魔法の輪」に何事もなく入っているように見える人間が、必ずしもその魔法の完全なる影響下にあるとは限らないということである。

例えば、「魔法の輪」の中に入り込みながら、時にはそこから逃れ、その魔法とそれぞれのやり方で格闘した者たちもたくさんいた。例えば、ザミャーチン、ゾーシチェンコ、プラトーノフその他のたくさんの作家たちがそうであり、また「ソビエト語」の体系が言語だけでなく他の記号ジャンルにも及んでいたことを考えれば、他の多くの芸術家たちもまたそうである。そのような芸術家たちのレトリックを解明する試みは、芸術家個人の研究として盛んになされているが、それは「ソビエト語」からの「偏差」として捉えられるべきものでもあり、「ソビエト語」研究の側からの発展的なアプローチも必要だろう。<sup>39</sup>

しかしながら、「魔法の輪」への対し方は、このように、すんなりとその中に入っていくものと、それとは逆に、真っ向から否定するもの、という二つではなかった。特にポスト・スターリン期に顕著になった現象として、「ソビエト語」の描く世界が「虚構（フィクション）」であることを承知の上で、つまり「お伽話」が本当とは限らないことをあらかじめ知りつつも、それを括弧に入れて、あたかも本当であるかのように応じ（例えば、参照テキストに応答し）、その虚構の世界の約束事を演じるというものがある。これは、例えば、ユルチャクの『最後のソ連世代』が描いている現象に通じるものである。

ユルチャクによると、スターリンという絶対的な「主人」は、発話の文字通りの意味に評価を下す存在であり、外部の規範であるマルクス＝レーニン主義の真理に言説が合致するかどうかを決めていた。しかし、スターリンという主人が居なくなると、何が規範なのか不明確となり、それまでの文章や発言の引用コピーが広まり、しまいには権威的言説の定型の引用コピーそれ自体が目的と化す。そういう状況では、多くの人々はすでに権威的言説を文字通りに受け止めなくなっていく。つまり、スターリン時代には言説のコンスタティヴな（事実確認的）意味に重点が置かれたのに対し、ポスト・スターリン期にはパフォーマンスな（行為遂行的な）意味が強化されたという。<sup>40</sup>

実はこれと同様の視点は、1991年にリトアニアで開催された「全体主義言語」のシンポ

---

<sup>38</sup> Kotkin, *Magnetic Mountain: Stalinism as a Civilization*, p. 220.

<sup>39</sup> 「全体主義言語」研究を基礎とした上での文学作品にアプローチした *Купина* の前掲書がある。

<sup>40</sup> *Юрчак. Это было навсегда, пока не кончилось*. С. 74-75; ユルチャク『最後のソ連世代』32-33頁などを参照。

ジウムでもロシアの言語学者マクシム・クロンガウスによってすでに提示され、議論の的となっていた。<sup>41</sup> クロンガウスは、公的生活と私的生活の分離が強まった 1970 年代から 80 年代初頭の「成熟した社会主義の時代」の「ソビエト語」の特徴として、言語の「儀礼化」を挙げ、次のように、ソ連社会では「通常のロシア語」と「儀礼化したロシア語」による「ダイグロシヤ」が成立していたと主張した。

[ソ連社会では] 儀礼化は社会の言語活動をも捉えた。さまざまな演壇での演説、大会や会議、会合などでの演説、また政治のテーマでの討論や新聞の社説などは通常、新しい情報を伝えるようなものでも、真実を明らかにするよう働きかけるようなものでもなく、まったく模範的な儀礼と化していたのである。社会的、政治的言語活動は情報伝達の側面や、(しばしば政治活動に特徴的な) 遊戯的な側面を欠いたものであった。[.....] 成熟した社会主義の時期のソ連社会では事実上ダイグロシヤが存在した。つまり、(もちろん、ロシア語母語話者に話を限ればだが)「ロシア語」と「ソビエト・ロシア語」の二つの言語が存在したのである。<sup>42</sup>

クロンガウスが言語の儀礼化の例として挙げているアレクサンドル・ガーリチの歌の歌詞の一部を見てみよう。その歌には模範的なソビエト労働者であるクリム・ペトローヴィチが登場し、彼の言葉として歌詞が語られるが、彼はイスラエルの軍国主義に反対する集会で発言する際に、間違っけて割りあてられた原稿を読み上げてしまう：「イスラエルの軍国主義は世界の人々に周知の事実です！ 母親として、女性として、私は彼らが責任を取ることを要求します！ 未亡人となって何年もたち、幸せもすべて過ぎ去りました。でも私には立ち上がる決意があります。平和のために！...」。しかし、女性形で書かれた原稿の誤りに気づいた者は聴衆の中にはおらず、書記長も満足げにうなずき、発言者は喝采を浴びながら演壇を降りる——ここではもはや具体的に何が語られたかということは重要ではない。「イスラエルの軍国主義」が「悪い」ことであるのはすでに決まっており、それを批判し、決意を表明するという図式だけが重要なのである。つまりこれは、ユルチャクの言うところの「パフォーマンスな意味」が強い例そのものである。

1991 年のシンポジウムでは、このダイグロシヤ論に対して反論も出された。スイスの言語学者パトリック・セリオは、権力の言語と民衆の言語はそれほどはっきりと区別できるものではなく、実際には複雑に相互作用するものだとして反論し、シンポジウムでは大きな議論になったようである。<sup>43</sup> たしかに、ポスト・スターリン期において、例えば、「ブレジネフ」は日常生活において批判の対象になり得ても、「レーニン」はほぼなり得ないほど

<sup>41</sup> Михеев А.В. Язык тоталитарного общества // Вестник АН СССР. № 8. 1991. С. 130-137 を参照。

<sup>42</sup> Кронгауз М.А. Новейшая история русского языка. С. 159-160.

<sup>43</sup> Михеев. Язык тоталитарного общества. С. 130-137.

人々の意識の中で権威を保ち続けていたなど、<sup>44</sup>「ソビエト語」のすべての側面において文字通りの意味が失われていたわけではない。当然テーマによって「ソビエト語」に対する人々の接し方には差異があったであろうし、また、「ソビエト語」と日常語が複雑に相互作用する場面もあったに違いない。

しかしながら、「パフォーマティヴな意味が支配的な社会における人々の言語活動」という考え方そのものは、「魔法の輪」の効力そのものを相対化して見る視点を与えてくれるという意味において、「ソビエト語」研究にとって本質的に重要であると思われる。

## 7. さいごに

これまで、「ソビエト語」をめぐるさまざまな言語学的問題に触れてきた。では、これらすべてを見据えた包括的な研究はどのようにしたら可能になるのだろうか。ここで、そのアプローチの一つの例を提示して、本稿を終えることにしたい。

まず、社会史研究における言説分析のように、ある具体的なテーマにおける言説群を取り上げ、その中の基本的な物語構造を明らかにする。そのうえで、それが言説空間の中でどのように互いに関わるかを考慮に入れながら、そのテーマがさまざまなテキスト・タイプ（ジャンル）を通してどのように展開していくかを、ジャンルの言語的特徴、言語のイデオロギー的使用などにも目を向けつつ、できるだけ具体的に追ってみることが必要だろう。その際、第6項で見たような、言説のコンスタティヴとパフォーマティヴの意味の強度の度合い（それはつまり、メッセージの受け手による「受容」の問題でもある）を考慮に入れて、総合的な視点から記述を試みなければならない。そのような分析の積み重ねによって、従来の研究で得られた知見が生かされつつ、かつそれぞれの時代の「ソビエト語」の全体像が多少なりとも明らかになるように思われる。

---

<sup>44</sup> Юрчак. Это было навсегда, пока не кончилось. С. 202; Юрчак 『最後のソ連世代』 128 頁。